

昭和二十七年八月二十三日發行

三種郵便物認可  
(毎月一回・十五日發行)

(通第一六一号)

# 慈光

第十四卷 第八號

## 目次

教行信証「信卷」三信釈(四)	近角常觀	(1)
孟蘭盆經に就いて	花田正夫	(7)
大悲はくりかえず	榎原徳草	(11)
三瓶老師を庵室に訪う	松村繁雄	(15)
堂の鈴	佐藤強三郎	(18)

「教行信証」信卷三信釈 (四)

近 角 常 観

「至 心 釈」 続き

今席は「大経」の御文より初めます。

是を以て大経に言編く。欲よく覺かく願ん覺かく善ぜん覺かくを生なぜず、欲よく想さう願ん想さうを起おこさず。色しき香かう味み之の法ほうに著ちやくせず。忍にん力りき成じやう就じゆして衆しゆ苦くを計はからず。少せう欲よく知ち足そくにして染せん患わん痴ち無むし、三さん昧まい常じやう寂じやくにして智ち慧ゑ無む碍がいなり、虚こ偽ゑ諂てん曲きやくの心こころあることなし。和わ顔げん愛あい語ごにして意いを先まにして承じやう問もんす。勇ゆう猛まう精しやう進しんにして志し願げん倦けんむことなし。専せんら清せい白はく之の法ほうを求もとめて、もつて群ぐん生じやうを惠ゑ利りす。三さん宝ぼうを恭こう敬けいし、師し長じやうに奉ほう事じして、大だい莊じやう嚴げんを以もつて衆しゆ行ぎやうを具ぐ足そくし、諸しよ衆しゆ生じやうをして功こう徳とく成じやう就じゆせしむ已ま上じやう。

これからは法蔵菩薩の修行の有様を「大経」及び「如来会」で示されたる御文であります。これは既に前席にもお話せる如く、仏より我々の罪深く浅間しき様を見て、その者を遣る瀬なく、自ら菩薩の修行を為し下されたる修行の

有様である。この御修行があつて仏の遣る瀬なき大悲が、事実に現れて下さるのであります。

このことは既に前々席から丁寧にお話せる処故、よくお頂き下された事と思ひます。先ず前々席からの大要は、我々人間は五分々々の有様である。この五分々々といふ事は、我々の善きも、悪しきも皆五分五分で、先ず我々家庭にありては家庭で互に心隔て、互に心のさぐり合ひをして居るのである。「彼にはこの心がある。誰にはこの思ひがある」と、互に心を探り、隔て合つて居るのが、即ち五分五分である。

それであるのみならず「彼は斯くする故、我は彼に対して斯くせねば義理が濟まぬ」と。これが心に深く信ずる処ありて絶対的に自分の所信の上より斯くするのは無くして、する事、なす事、皆「向うがかくするから、自分は斯くしなければならぬ」とやつて居るのである。

即ち我々は善につけ、悪につけ、常にこの五分々々につきまつわられて居るのである。而してこれが小なる家庭の間柄ばかりで無く、政治実業国際間の大問題に至るまでが皆これでやつて居るのである。

「相手が斯くするから、此方は斯うしなければならぬ」向うがああするから、此方はこう仕なければ自衛の道が立たぬ」、「相手国がああするから、此方は斯くせねば国際間の礼に背く」と、やつて居るのである。

斯くこの世で我々のする事には一つとして絶対的のもの無い事となる。それ故、することは設たい善ぜんをして居つても、それが真の善で無く、作つた善である。作善である。

又これが悪い方となれば如何程でも悪しくなり、遂に自分が地獄に墮ちるも知らずにやつて居る、ということになるのであります。

そこで総て仏教の上ではこれを業報と言う。殊に「歎異抄」の第十三章には

よき心の<sup>お</sup>おこるも善業の催すゆえなり。悪事の思われせらるるも、悪業のはからうゆえなり。故聖人の仰せには、兎毛、羊毛のさきにいる塵ばかりも、造る罪の宿業にあらずということなしとしるべしとそうらいき。我々の心に善き事の思われせらるるも、又悪事の思われせらるるも、皆業報である、とある。

処で我々のこの業報を、今現在自分の仕て見よう無き有様と気づくでなしに、凡て業報で出来て来るのだから、しようがないとなると、業報という意味が間違つて来るのである。業報とは今言うこの相對界の仕て見よう無き五分々々の有様が、業報なのである。我々この<sup>此</sup>て見ようなき業報の五分五分の浅間しき根性があり、それで我もやるから、人もやるとなつて居るのである。凡て仏教で業報という事は、日々の家庭生活を始め、政治、実業、国家、国際関係、人間のする相對界のすべては皆五分五分で、皆同じ事なのである。これで大体分ると思ひます。

○ 処でその業報につきままとわかれて、夫れから夫れへと行くの故、実に切り無しである。相手の悪に連れられて、其上々々と行くの故、何処まで行つても切り無しである。其処で然らばその業報が何とかして止まるかというに、どうしても止まぬ。考えて御覽なさい。

「自分は善く仕度いのであるけれども、向うがああするから、此方もこうしなければならぬ」 「向うはきつとこうして来るに違わぬから、此方は斯くして行かねばならぬ」と、

この様にみんなが先き廻り／＼して、互にやり合ひ、それからそれへとまつわられて動けぬようになつて来て居る

のである。これが銘々業報にまつわられて居るのであります。故にこの業報を我々自分の悟りの力で絶つ事が出来るなら、解脱が出来るのであるも、それは到底出来ない事となつて居るのである。

其処で仏の救いなる事はどうかと申しますに、その業報に閉ざされて脱れる事出来ぬ奴が可哀想である故、その互に利益を取り合い、利欲の争いをして居る哀れなる有様を仏の恵みより御覧下されて

「さて、可哀想なことである。その業報に繋がれて苦しんで居る者を、業報より離し救うには、その業報のため人に隔て憎んで居る、其の業報に縛られた者を、飽くまで見捨てずして、其の者を救うには、五分五分の慈悲では駄目である。……」

一切諸仏の法はあれども、諸仏の救いは矢張り、善を為せよ、修行をなせ、其者を救わんとの教えなれば、如何にせん、我々にはそれでは仕ようが無い。も一つ言え、五分五分で苦しんで居る世の中なれば、五分五分の法を以てしては、とてもその者には駄目である。それではきつと、「此方から善くさえ出来れば、向うからも善くして下さる法である。それでは我々にはとても出来ぬ」と初めから捨てて仕舞うに決まつている。故に若しやここに「衆生無辺

それを打ち砕いて下さるのである。

故に一度、この遣る瀬なきお慈悲に気がつけば、「長々浅ましい事であつた。今迄これ程までの広大の御哀れみとは気がつかず、五分五分でやるより外、しようがないと思つて居つたは、実に申し訳なきことであつた」と、吾々の五分五分の根性が、如来の広大な慈悲に囚えられて、初めて「ああ悪かつた」と頭が下るのである。これが真にお慈悲が頂けたものであります。その頂けたが、私のこちらの方で頂けたるにあらず、仏のお心が今言う広大なお心です。まします故に頂けるのである。

これが一昨日申した姨捨山の譬喩で申せば  
奥山に枝折り／＼は誰がためぞ、

親の身すてて帰る子のため

とある歌の意である。親が自分の子供が哀れで仕ようが無いというに、唯可哀想であるというだけならば、子供は唯有難いというだけであるも、子供は実に親を捨てて出かける子供なのである。然るに親はその捨てる子供がいよ／＼可哀想で捨てられぬとお慈悲なのである。さればこそ、その広大なる御慈悲のために「さては／＼その広大の親心でましますか」と頭が下るのであります。

次第々々に尚講話が進み、昨日如きは講話後大分お気づ

誓願度」と我々絶対に善くし、絶対に道を修することが出来るならば、それは必ず善くなれるに決つてるのである。

即ちこれが、聖道門自力の道なのであります。即ち我々絶対に人によく出来、最後まで無限にそれでやりおさせることが出来るならば、それは必ず解脱の境に到れるにきまつてるのである。が然しそれが我々に出来るならよけれども我々には出来ぬ。遇々よくしたと思つても、忽ちもとに戻り、五分五分根性のどうしても抜けぬ我々である。直に人に對し、飽くまで無碍に出来るならよけれども、それが到底我々には出来ぬ。

故に親鸞聖人はそれが出来るならよけれども、出来ぬ故、遂にその道聖道を権化とまで言い切つて、はね退けてお仕舞い下されたのであります。而してそれが出来ぬ故、どうしても我々は五分五分を離れることが出来ぬ。その離れることの出来ぬ、その五分五分のやまぬ、飽くまで五分五分でやり抜いて居る。それを御覧下されて「さて／＼その者が可哀想である」と呼びかけて下されたのであります。故に仏のお慈悲を頂くに「我々は悪いけれども、仏の方より此者によくして下さるのである」と、斯く言つてい

るのでは、仏のお慈悲は分らぬのである。  
仏のお慈悲は、斯く私が五分五分の根性の止まぬ、それが哀れであると、私のその五分五分の根性の根に向つて、

下されたる方も多いのである。それは前々席来御話する処を、各個人々々に差し向いで御話する時、多くの方が皆およろこび下さるのである。それはどうかと言ふに、多くの方が、人を不足に思い、人に心が隔たり、人生に行き当りて、何ともして見ようが無いという処へ、その五分々々の根性をよま知り抜かせられて

「成る程、汝がその心で悩み苦しんで居るを我はよく知つて居る。如何にも汝には其の悪しき心がある。それを我はよく知つて居る。併しながらその悪いからしていかぬと言ふのではないぞ。その悪い心がある故、我は弥々それを斥けず、夫れを益々不慙で憐れむ慈悲であるぞ」

との真の仰せが、仏の仰せであることを聞かると、総ての人が信仰に入らるのであります。我々が自分の五分五分の根性で、明け暮れ人と疑い隔て、苦しんで居る、その我々の意中を残らず見せなせられ、

「其の汝の悩み苦しんで居るを、決してそれでも善いとは言わぬ。悪いことは実に何処までも悪い。実に橋樑高きなして見ようの無い奴である。何処までも浅ましい五分五分の根性の抜けぬ、ねじけ者の汝である。併しながら、だから其の汝を捨てるとは言わぬぞ。それが実に汝の本姓である、汝の自性である。その本姓を持ち、その自性を抱え、迷い流転して居る汝のそれが可哀想で見て居られぬ

故、我はその為に現れて長々苦勞をして来たのである。その汝の為の親が、ここに疾うから待ちかねて居ると言つて居るでは無いか。」

と呼びかけて下さるが仏の御声であります。

で一度この仏の御声に気がついた時は、恰も今迄善し悪しと人生にいさかきをして居つた者が、突然横あいより如来に喧嘩を買われた如く、又今迄人生の小さな五分五分でやつて居る処へ、いきなり背後より大なるもので捕えられた形で、今迄人生で、善し悪しと「鉄葉の缺け」の取り合ひをして居た者が、「汝それはブリキの缺けではないか」と言われても「いやたとえ缺けでも人が取る故自分が取らんならぬ」と苦しんで居るのであるが、恥しや無限大悲の仏は、私が実に人生に斯くの如き事をして居る。その浅間しき事して居るその者が憐れとの遣る瀨なきお恵みと承り「さても／＼長々このために御心配をかけまつり、このお慈悲を頂くことをしなかつたことが誠に申訳ない」

と氣づいた一念に、今迄の他の物はすべて手より離され、唯広大の南無阿弥陀仏のお慈悲ばかりとなるのである。故に仏のお慈悲は、私が悪い心がある、浅間しき思いがあると歎いて居る間は、まだ真にお慈悲が頂けたもので無いのであります。

○

である。故に我々こちらの方には欲覚、害覚あるも、仏の方よりはそれが無い、というようにここを手軽く思うて、は大間違ひである。こちらが罪業を起せば起す程、弥々涙を以て向うて下さる大悲の御修行なのであります。

次に

「……………色声香味の法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染患痴無し。三昧常寂にして智慧無碍なり。虚偽諂曲の心有ること無し。……………」

色声香味の法というは、即ち色声香味の六塵である。仏が我々のために苦勞して下された有様というものは、少時の間と雖もこの六塵の汚れに執着して下されたという事なく、忍力成就して、如何なる艱難にも甘んじて耐え忍び、如何なる衆苦をも苦として下されぬ。又少欲知足にして一点の欲も起させられず、全く貪欲瞋い愚痴の三毒を離れて御苦勞を為し下された。又三昧常寂とあるは、三昧は定である、仏の衆生を知ろし召さるる静かなる心である。そのお心常に静寂にして、智慧無碍であつた。又虚偽諂曲の、うそ偽り、へつらいの心が更に有ることが無かつた、というのには、これも前々より言う如く、私が虚偽諂曲の塊りの奴であるからである。我々は虚偽諂曲などは或特別の場合に起す浅間しき心にして、常にそうして居ぬと思つて居るのであります。人には好意を持てばすぐへつらいに陥

そこで本文今席の処になり、私が斯く五分五分に附きまわられて浅間しき事ばかりして居る。「無始より已来、今日今時、今の時に至るまで、穢悪汗染にして清浄の心無く、虚偽諂曲にして真実の心」というものは微塵もある事がない。その哀れなる様を御覽下されて、仏がその私のために不可思議、兆載永劫の御修行をなし下されて、あなたも身も口も意も、清浄真実の御まこと心の塊りで、私に広大の御慈悲を廻施して下さる。その法蔵菩薩御修行の有様であるとして、『大経』の本文をお示し下され、即ち

「是を以つて大経に言わく、欲覚瞋覚害覚を生せず、欲想、瞋想、害想を起さず。……………」

これは私が日夜、欲覚、瞋覚、害覚を起しているもの故、それを御覽下されて、それが実に可哀想であると、我々が欲を起すを見ては欲の心を起さず、我々が瞋りに狂えるを見ては、その者を助けるためにと瞋りの心を起さず、害の心を起さず、欲想瞋想害想を起さずである。即ち私が色々悪しき心を起して人生に悩み苦しんで居る、その私の一一の浅間しき心を御覽下されては、その者のために、それに應じて三覚三想を起されぬのである。故にここは、我々は斯く欲覚瞋覚を起すも仏は起されぬというのでは無く私が斯く欲覚煩惱を起すを見て、それが実に不愍であると、その私に向い、この遣る瀨なきお慈悲の上よりの御修行なの

り、人に親切を起せば虚偽に落ちこみ、我々のすることなすことは常に虚偽諂曲を離るる事能わぬのである。そのためそれを哀れみて、大悲の仏は斯くこの処、総て仏と我々と裏腹になつて居る処をよく頂かねばならぬのであります。嫉捨山の喩えで申せば、親の道しるべは、親のための道しるべで無い、我々親をすてる悪しき子供が不愍なばかりに、親は道しるべをして下されたのである。「和讃」には

諸仏三業莊嚴して 異等なることは、  
衆生虚誑の身口意を 治せんがためと述べ給う。

一切諸仏が平等に身口意の三業を莊嚴して下されたは、諸仏は我々と離れて勝手に莊嚴して下されたのでは無い。即ち「衆生虚誑の身口意を治せんがためと述べ給う」我々身を動かせば偽りを行い、口を開けば「うそ」を言い、意に常に悪を思う。そういう処の浅間しき私である。その私故、その私を哀れみて、その私の心を根治するが為、私が悪を起せば起す程、いよ／＼清浄真実にして下さる仏の御苦勞であるとお知らせ下さるのであります。

又次のには

「……………和顔愛語にして意を先にして承問す……………」  
我々は常に荒き言葉を以て、利己主義のがち／＼で自分の浅間しきことを忘れて振舞つて居るに係らず、仏はこの者に優しき顔容、優しき言葉を以て向い、常に衆生の意の

ある処を知つて、其の者の意を先にして、其の者の心に應じ、其の者の意に添うようにして、気がつくまで、飽くまでお導き下さるといふのである。これなども、私の罪業の浅間しきと、仏のお慈悲の廣大なるを別々に仕ておいてはならぬ。それでは仏の遺る頼ない救いということが無になつて仕舞う。私が斯く五分五分で、常に人に反抗の心を抱き、容易に人の親切なる言葉を受けつけぬ。その頑迷度し難き奴であるばかりに、弥々それが不慙と、益々その者に広大なるお心で向つて下さるのである。所謂「御伝鈔」で親鸞聖人に反抗する弁円が、聖人の御前にて出た時

## 孟 蘭 盆 經 に 就 いて



花 田 正 夫

「聖人左右なくいであいたまいけり。即ち尊顔にむかいたてまつるに、害心たちまちに消滅して、あまつさえ後悔の涙禁じがたし。云云」  
聖人を殺そうと思つて出て来たのに、聖人が「さてく可哀想である、そんな心ではいかぬ、人を敵と見るでは無いぞ」とある優しい廣大の御心を以て向つて下されたのである。その廣大の御心で向つて下さればこそ、如何に頑強な弁円も、ひと目、尊顔に接するなり、立所にお慈悲に融かされて仕舞うに至つた、というのが実にここでありませう。  
未 完

私は明治卅七年に岡山県の玉島の近くの農家に生まれましたが、一村あげて真言宗で、お盆の行事も真言宗流に、こまめな祖父が大切にいたしました。先ず墓地の清掃から始まり、仏壇の莊嚴、迎え火、送り火、盆提灯、棚経、施餓鬼、等々、更に盆の太鼓や、唄や踊りなどはお盆の夜を賑かな

ものにして居りました。  
この行事もそれぞれ地方色に彩られて居ることでありませうが、この起原は、うらぼん経によるのであります。この経は聖徳太子の頃に我国に初めて伝わり、聖武天皇の頃には、全国で講讃され、お盆の行事も普及されました。

思えば我国の風習となつてすでに千三百年の長い歴史を持つて今日に及びました。

年々、歳々お盆の太鼓が鳴り、踊りの唄の聞えるについては、うらぼん経を思い、目連尊者の故実によつて、深く省させられることとあります。

さて「うらぼん」とは梵語で、「倒懸」と訳されて居ります。さかしまにかかる者の苦難を救う方法を説かれた経典というのが、経題の意味であります。

この経の大意を申しますれば、目連尊者の修行が満足されて、遂に六神通を得たのであります。神足通、天眼通、天耳通、宿命通、他心通、漏尽通、であります。そこで非常なよろこびの心から、父母の乳哺の恩をむくいたいと願つて、天眼通を以つて世間を觀察して居りますと、尊者の亡き母が餓鬼の中に生れて、倒懸の苦難をうけ、飲食もなく、皮と骨ばかりになつて居るのであります。

目連尊者は悲傷やるかたなく、鉢に飯食を盛り、馳せ参じて母に捧げました。母は早速左手で鉢を持ち、右手で食物を掴んで食べようといたしますと、その食物が火団となつてどうしても食へることが出来ません。

尊者の孝慈のまことをつくしましても、この母の苦報を

どうすることも出来ません。尊者は悲しみのあまり見栄も、なりもかまわずに、涙を流し大声に泣き叫びながら、仏の御前にかえり、つぶさに事の次第を申し上げ哀愍を請ひ奉つたのであります。

仏は静かに仰せられるには  
「汝が罪根深く結ぶ。汝一人の力をもつてしては如何とも為しあたわず。汝が孝順のほまれ、天地をゆるがすとも、天地の神祇も、魔界外道のたくいも、四天王神もまたいかんともすること能わず。

吾、いま汝がために救済の法を説かん。  
七月十五日、安居を終りて衆僧の反省懺悔の日、七世の父母、及び現在の父母厄難のもののために十方大徳の衆僧を供養すべし」

と。目連は倒懸の苦を続ける亡き母の救いの道を知り、今まで号泣した声はカカリと消えて、よろこびい喜んで十方の衆僧を大供養するのであります。衆僧も亦仏意をうけて供養を喜びうけて、歡喜の音が地に満ちた時、目連の母の苦難もおのずから解放され、よろこび踊るのであります。

この経意からお盆の行事が始められたのであります。この経の要点を申し上げます。

第一に、尊者の心眼の開けた時、亡母の倒懸の苦が発見されたという一事であります。自我中心の考えで総てを律

して行く我執我慢の心が砕かれて、無我の智見によつて、初めて発見せられる世界であります。

阿闍世王が大慚愧におちた時、仏弟子ギバ大臣は「善哉、大王今や懺悔のころあり、懺悔の心なき者は畜生と名づく、懺悔の心ある者にして初めて親兄弟あることを知る」と告げて居ります。われよしと考えて居る時には、親兄弟は皆火鉢同様に見えていて、冬は有難く、夏は邪魔ものの域を出られません。そういう眼で見、そういう手で扱ふ時、亡母を倒懸の苦におとすのであります。その自己の愚さに気付かされる時、「空中に親の声が聞える」のであります。

浦島太郎の物語で、竜宮城に遊ぶ浦島の心眼に父母の幻が見え、乙姫達と別れて故郷に帰つて見れば、身はずでに白髪、父母すでに世に亡く、家も分らぬという風に述べられてありますのも、思い合せられます。

第二に、仏が「汝一人の力をもつてするも、汝の孝順の声に天地の神々が感動し協力したにしても、汝の母の倒懸の苦は消えない」との誠めの言葉であります。

これは相對差別の世界にあつては、真実の光明のないことを知られるのであります。「今生いかにとおし不愍と思ふとも在知の如くたすけ逐ぐることを極めてありがたし」とあります。すでに転倒の妄見におちて我武者羅、無規道

を行く私共の罪根の深さが親を餓鬼道におとして居るのであります。それでありながら自分の力が足らねば、神々をたのむで見たところが、らちのあくはずもありません。

第三に、救いの道の絶えて無きを知らしめ給う仏が、ただ一つ、仏、法、僧の三宝に帰依せよ、と勧め給うのであります。こは、この経の中心点であります。

自分の力でたすけ得るのであれば、捧げる食物が火団となるはずもありません。も一つ徹底して読めば、私共は火の燃える食物をしか親に捧げていないことを知らされます。そうした虚仮の孝心を世間がいかに賞めたにしても、親も子も救いの光は射しません。

かかる大不孝者、大罪人は、身自ら倒懸の苦におつべきであります。天神、地祇も、如何ともすることは出来ません。

唯ここに残るは一つ、三宝の大悲であります。かかるあさましき偽善者の我等を徹見され、そこに七世の親子が珠数つなぎに墜ちて行くを見抜かれて、僧となり、法となり、仏となつて、救いの御手をひろげて待つて居られるのであります。

『煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなれることあるべからざるを憐み給いて、願をおこしたまう

本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり』と歎異鈔にあります。

又、聖徳太子は憲章第三に『篤く三宝を敬え。人はなほだ悪しきものなし。夫れ三宝によりまつらずば何を以てか枉れるを直うせん』とのお示しも同じころであります。

『未代の凡夫、罪業の我等たらんもの、罪は如何程深くとも、我を一心にたのまん衆生はみなことごとくすくい給うべし』

と蓮師は、仏恩のまことを、御代官として名告り知らしめて下さつていたのであります。

かく仏に帰依し、仏に救われる身にこそ、今世一生の父母でなく世々生々の父母をたすけ逐げる無碍光が射すのであります。未通りたる大慈悲を念仏自然の徳に恵まれるのであります。

若しこれをあやまつて、祖先に供養し、餓鬼に施すことによつて、地に光明が来る、幸福が与えられるかの如く思ふならば、それは「麦飯で鯛を釣る」道理で、神仏を利用して私利私欲を求める邪道であります。また直実の布施などは小慈小悲もない私共に、心も言葉も及びもつかぬこととあります。

唯ひとり、仏の大慈大悲心に帰しますとき、無明長夜に

灯炬はかがやき、諸上善人の俱会一処の歡喜も恵まれるのであります。

最後に、歎異抄五章に「親鸞は父母孝養のためにとて一遍にても念仏申したることいまだ候わず」と吾白せられて、聖人御自身の内なる虚假さを知り尽くされた身の程を打ち明けて下され、更に「一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり」と、この世の親を縁として、一切有情の上に世々生々の父母のつながりを発見せられては、その救いは「いずれもこの順次生に仏になりてたすけをうらうべきなり」のほかに道なしと表白されて居られます。

この歎異鈔の意でこの経を拜読し、仏の支意をそこに見出して、千三百年承統いて伝承されたお盆の行事を、単なる踊り、唄い、賑う、というものでなく、且つは、祖先崇拜の儀式でもなく、飽くまでも仏心のまことに貫かれて子も親も、七世のつながりまでも救われて行くひかりにせめられていることを知り、直実の意味のお盆を迎えられんことを願うてやみません。

### 病床の詩

暮鳥

朝である 一つ一つの水玉が  
葉末葉末にひかつている ころをこめて  
あゝ、勿体なし そのひとつひとつよ

# 大悲はくりかえす

榎原徳草



七月号の「自照」誌に故木村誠一氏の遺児ひとりびとりに対する遺言状が掲載されていたが、父の亡きあと佛法を求めること、母の言をよくきくことなど、年齢に応じて淳と嚙んでふくめるように言いのこしてあるのを拝読して思わず胸が熱くなりお念仏したことであつた。

こゝで感を新にしたことは親の子等に対する深い愛情であるが、その親から子に対する人間の愛だけでなく、この人間としての愛と渾然融合して一体となつて、訓え、いましめ、勧めてくまない南無阿弥陀仏の御慈悲である。木村誠一という一個の人間の人格だけならば、そう感動もしなかつたかも知れないが、木村さん全体が光り輝くものに包まれてそれと一つになつて、おまことを勧めお念仏の大事なこと、永遠に易らぬ御真実であることを説きすゝめてお愛いお前達も皆こゝに一つになつて何れは来てくれよこれより外に親子のほんとうの契りはない、真の吾等の安らいはないのだ、どうかこゝに帰してくれよ、と切々として真

やま

に行つたこと、など私にも子供のすべてが瞭然と浮ぶのである。一人の子を見てみると、あれもこれも思い出されてくるし、フト一人居の胸に思い浮ぶ子が、それからそれへと来しかたにあつたことが次々に浮んでくるのである。目前に在るときも、居ない時も動静陰顕出没して親の胸にこいこんでくる、喜びと憂えと不安とそれらが一つになつて子を思い念じる心となつて在るのである。そしてその一つの親のいのちが子等に往還不断にこれまた一つになつていのである。大きくなつた将来のことを思うこともある、あの子の欠点は終いにはこんなことになりはしないか、あそこがのびてゆくと私と同じ運命になりそうである、そこが心配でならぬなど——これが親のいつもの状態である。木村さんが死を覚悟したベッドの上で吾が子の一人々々に書き遺したあの遺書は、きつと親子一つの一人々々への切々たる哀憐の中に、吾が一人々々の子を前にして綴られたにちがいない。

足利浄円師の名、白井成允師の名が出て来る、明治書院発行の真宗聖典を求めて判つてもわからなくてもこれを拝読せよと教える、歎異鈔をよく読めとさすと、朝夕仏前にお礼をとげよ、女の子には、母の代りにお花を供えよ、月に一度でもよい皆そろつて仏様に参つて読経せよ等々と、一人ひとりに何とかして仏縁を結ばせ、御真実とのつながり

夜中の病床に筆をとつていられる木村さんの姿を思うと、それは光り輝くものがあつたらうと思われる。

哀切限らない親子の永別を前に覚悟して、ただ愚痴に沈み、人間的なベトベトした愛だけで嘆き悲しむのが当り前であるのに、その思いは凡人である限り、木村さんも同じように身体一杯に充滿してゐる筈なのに、それを全部転じて光りとなりその光りを子等にそゝいでやまない、吾木村さん自身の意識ではそんなでないだらうが、吾々にこの大転換が不思議に感ぜられてくるとは尊い極みである、有難い限りである、まことに頭の下るしみじみとした深い感動であり、何とした広大無辺の仏の大悲であらう。

親はその子供の一人々々の性格の相違、欠点、長所などあの子にはあゝいうことがあつた、赤ん坊の時であつた、三つ四つ時にはお便所に行くには二人一諾でなければ行けなかつた、冬の火鉢のぐるりに当つてゐる姿、庭で組んずほぐれつ上になり下になりして相撲とも喧嘩ともつかぬことをやつていたこと、悪いことをしてあの家に陳謝

を結ばせて、お慈悲のお念仏への糸口を作らせた子育てた

いと、木村さんの一行一字々に滲みでている。

一刀三礼、一字三礼という、仏師が佛像を刻むとき一刀刻んでは三拜する、僧が写経をする、一字書いては三拜する。私の寺には一字三礼の法華經普門品がある、天皇の親筆と伝えられているが、一字づゝ蓮華の台座の円光の中に書いてある、蓮華は金糸でつづつてある。積尊の金口の説法なる法華經普門品が一字々々蓮華の台座に書かれるのは当然であるが、その書く者がまた一字々々に三拜して写字写経した、これまた書かれたお方も蓮華台上の人と私には思えてくる。

私は木村さんの遺児各々一人々々のことから、一刀三礼一字三礼を思い出したのであるが、それは矛盾したまゝで表裏相通じると思ふのである。

もう一つ木村さんの遺児に訓える心から思い合わされることがある。それは一人々々の子供に同じことを言うて居られる、つづまるどころ陰に陽にどうぞ人間に生れ人間として死んでゆくのに最も真実なるもの気高いもの広々したもののお念仏を聞いて仏の真実を知つて貰いたくてならぬ、木村さんの大悲心、嚙んでくくめる心、恰も無智の人のようにさえ見えてくるほどに自己を忘れ果てた木村さんの姿

から湧き出てくる繰り返してやまぬ大悲の心である。

それが成るか成らぬかを算段して始めたことでない、取引根性を離れ打算を越えた、それらとは全く別の、赤いから赤い、熱いから熱いというような切実な、一から始まつて一に終るといふような、言葉ではもどかしいような仏の眞実そのもの、それを言い表せば、もうそこには繰り返す外にない仏のまこと、それを訴えずにおれない姿が一通々々の遺言の書のうちに脈々として流れ貫きとおしておる、これが私には胸に応えて涙を催してくる。

僅かに残っている生命の燭光をペン先に凝して、届けずにはおかない、聞いて貰わずには居れない阿弥陀仏の大悲悲心が、最後の光りを燃え輝かせている、切なる願いが一人々々に傾倒されてある、これは木村誠一氏であつて実は阿弥陀仏そのまゝの具現でありましよう。

大無量寿経は眞実の教であると聖人は御本典開卷第一に筆を染められた、その大経の中に法蔵菩薩が世自在王仏のみもとにて四十八願を建立される。そしてこの願成就して阿弥陀仏となられたのである。この四十八願の一願々々に繰り返しがある、それは『設し我れ仏を得たらんに……正覚を取らじ』と、四十八願の一願一願に誓われておられる。私は三十一才の秋にむさぼるよう大経を拝読したがその時、「どういふことがらを仏は成就して下さつたか」

迦如来の大慈悲がそのまゝ大経の四十八願於いても「設し我れ仏を得たらんに……正覚を取らじ」と一願々々に宣言せずにおられなかつた法蔵菩薩の大悲心と拝したかのように感じたのであつた。

私は池山先生から「たゞ念仏して」の仰せを繰り返しくりかえし聞かせて頂いた。先生は講演、講話のそのたびに、私の話にはいつでも出てくるが、と自ら云われながら「親鸞におきては、とあるのを、池山におきてはとおきかえて」、「たゞ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、よきひと親鸞聖人の仰をこうむりて信ずる外に別の仔細なきなり云々」と、身体を少し前にかぶむように、指を胸の辺りにさして「南無阿弥陀仏……」と念仏一つに乗托する、あの最高潮の姿を示される、すると我々拝聴する面々にその心光が照射してきて異口同音に老いも若きも南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏とお念仏する。先生のお念仏と一つ流れに唱和されてくる。その時は恍惚としてくる、涙が頬を伝つてくる。身心柔軟にして快樂安穩の経文の文字をそのまゝ会場に移してきたいほどである。こんなことが、先生の講演には必ずある。いつでも出てくるのである。

私なんかはそのたびに、「そらもうじきに先生の『池山におきては……』が出てくるのを当然のように待ちもつたのだが、今にして思えば、先生の悲心息むことなき、ど

とそれに氣をとられて、「設し我が仏を得たらんに……不取正覚」で終る一願々々が、いらだたしくてならなかつた、終いには上と下とは退けて中間の願文をのみ読み進んだのであつた。私には繰り返し同じことを重復されるのが邪魔になつた、そしてこんなことを思つたのである、印度の文学的表現はこんな形で表現するのが自然なのだろう、民族の感情の相違から来るのだ、仕方がないが、我々にはこれではピッタリしない、と。

しかしずつとあとになつて阿弥陀経を拝読したことがあつた、その時分また西田哲学を読み返していたが、阿弥陀経には「舍利弗」と呼びかけられる釈尊は、どうしてこんなに度々重ねて舍利弗々々とよびかけるのかと思議に思つた、数えてみると三十六たび釈尊は舍利弗々々と呼びかけておられる。私はこの如来の繰り返し／＼呼んでやまない舍利弗への大悲心に頭が下つた、深く感じ胸に大悲が輝いたことであつた。西田哲学も二三行読むと例の「絶対矛盾的自己同一」といふ句が出てくる、こんなに度々出さなくてもよいのにと思つていたが、阿弥陀経の大悲心で西田博士のコレダ／＼と指し示す大悲を感じたことであつた。

この阿弥陀経における舍利弗よと繰り返して止まない釈

うぞしてこの念仏一つを聞いてくれよ、との一心専念より出でた大悲の繰り返しであつた、大悲なるがゆえに、常にくりかえされるのであつた。一つのことを常にくりかえず、私は大悲大悲は、そういう繰り返しにあると思う。否、三千年以来、七百年以来、念仏はまことに我一人のために大音にくりかえされた、その選派の願心からの廻向、大悲廻向の一心なる念仏は常恒不断に親様からくりかえされたから我等ごとき者に響き至るのである。

鎌倉なる大仏をうがみて詠める

伊藤 左千夫

かまくらの大きほとけは青空をみ笠と著つつよるづ代までに  
もろもろを救はむためと御仏の大き御像みすがたここにまつりし  
御仏のはなつ光はとことは国のもろ人まねくすくはむ  
みほとけの尊く放つ御光を仰ぐすなはち罪ほろぶとふ

こしかたのかさなる罪も御仏の光に浴みて消えざらめやも  
青山の垣のまほらによろづ代といます御仏大きみほとけ  
青空を御笠と著せるみほとけのみ前の庭に梅の花さく



### 三瓶老師を庵室に訪う

松村繁雄

過ぐる四月一日、私は小妻を伴うて、島根県温泉津町井田、竜蔵寺の庵室に三瓶徳英老師を訪いました。目的は、老師の奥様の十三回忌に当つて、有縁の方々との法縁を結ぶうためでありましたが思えば一貧農にすぎない私があるく、県境を越えて、汽車も四時間を要するこの遠隔の地へ……是は一体何という善縁でありましょうか。

回顧すれば十三年前であります。私が浜田市の沖柳法姉の宅へ飄々として立ち寄りしました際、たま／＼お目にかかつた老師であります。爾来この庵室を訪ねること五度、その第一回は、奥様の七七日、ついで一週忌、五年、七年と、度々の御法要にお招きを頂いて御法縁を恵まれました。一樹の蔭に宿るのも遠き宿縁と聞くのに、まことに深い御因縁であります。

端的に申して失礼ではあります。老師は「今良寛」と申すべきか、その素朴清廉な風格は、良寛和尚もかくやと偲ぶるものがあります。老師は、大悲の願船に乗じて悠々と光明の広海を渡り給う念仏の人であります。それは

々々しいお姿であります。その中であつて、右の如き詩がうまれるのであります。

私はかつて「雨も降れ、風も吹け吹け、おん慈悲に抱かれて帰る今日のこの身は」と歌つて、大悲の中にある我身を喜ばせて頂いていますが、よく／＼省みますれば、私のは、喜ぼうがための喜びであつて、老師の徹到せる御法悦とは比ぶべくもありません。

思えば、口に南無阿弥陀仏と称えつつも、心は娑婆の泥濘にはまりこんで、惜しい欲しい、よいわるいの詮議に寸隙ないのが私、昨日もそれで過ぎ、今日もそれで暮れてそのうちには死んで行かなければならぬ私でありながら、大悲の御真実は更によろこぼうとしないのであります。然し、かゝる私を、かねて知ろしめされて「煩惱具足の凡夫」と仰せられたることなれば、その欲をすてよと仰せられる大悲ではありませんが、それかと云つて、口には念仏して「大悲をよろこぶ」と言いながら、心では妻があるから、孫があるから、健康であるからと、そういうものを擱えてよろこび、それが思うように行かぬと不安となり不足となり、内心つねに愚痴に満ち、表面は平穩に見せかけても心の底には世をはかなむ淋しい影が黒雲のようにつねに覆いかぶさっているのが私であります。そこで、それを払い除けようのためにお念仏を雇うて来て、淋しいから念仏す

そのまゝ、深い暗迷に眠る私に強い光明を放たれて、私を仏の安養浄土に誘いたまうものであります。

私はこの老師に邂逅し得たことによつて、この晩年を静かに微笑させて頂くのであります。これは、如来よりたまたわる久遠の善友でなくて何でありましょうか。

老師が最近私に寄せられたものに次の詩があります。

老朽穢悪身 値遇大悲親

日夜往業海 願船万里春

まことに、暗愚穢悪にして、日夜業海を往くより他に途のない私でありますけれども、宿縁多幸にしてここに大悲の親に値遇して見れば、往くところ光明の海ならざるはななく、將に願船万里の春、南無阿弥陀仏の風ゆるやかに吹いて、衆禍の波は悉く転ずる……老師はそれを身をもつて私にお知らせ下さつたのであります。

老師の御日常は、心無き人の目には、或は「乞食坊主」とうつるかも知れません。庵室は荒れ、僅かに雨露をしのぎ給うに過ぎず、纏われるものもお粗末で、見るからに痛

る、心細いから念仏する、というのが私のお念仏であります。

ところが、老師のお念仏は、私のそれとは全く違つてあります。一般の人情では、敗残見るかげもなく、誰一人見向こうともしないその御生活でありながら、朝に夕に独り静かにお仏前に端坐して、その日／＼をいそしまれるそのお姿こそ「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」の建現であります。これこそ、法悦せんがための法悦ではなく「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば徳英一人がためなりけり」と撰取の心光にとけ入り給う自然の風光であり、それはまた、この私を即得往生せしめねばやみたまわぬ如来大悲のあらわれであります。

今や世は、桜花の満開するが如くに「文化」ちよう享樂の花が咲き満ちて、我も人も酔うことを知つて覚めることを知りません。即ち身に美しいものを纏い、目に楽しいものを見、口に甘いものを味わうことが、人生の価値だとのみ信じて、むさぼることを知つて、与えられることを知らないのが当今の文化であり、そのために、人皆幸福をねがいつつも内には鬭争の焰を燃やして、寸時の休息もありません。よく／＼省みれば、そのような文化というものは、人間の

迷いの心に咲いている夢の花であつて、咲いた桜が明日はほろ／＼と散るように、覚めてしまえば他愛もない夢でしかありません。それでいてその夢に酔うて夢の外に久遠のひかりのあることを知りません。それでは折角の人生もまた夢であります。「若しまたこのたび疑網に覆蔽せられれば更りてまた曠劫を逡歴せん」これはまことに恐れても恐るべき人生の重大事でありませぬ。

思えば、その疑網に覆蔽せられて、寸前の享樂のみを追うて、久遠の光を忘れようとする私に「大慈の願船に帰れ、そうして光明の広海を悠々と旅せよ」と、つねに身を以て示して下さる、それが三瓶老師の尊容でありました。文化に狂酔する現代人には、乞食とさげすまれ給うても端然と久遠の大慈に微笑み給うかの円満なお姿こそ、人生の光ではありますまいか。私はここに三瓶師に邂逅し得た仕合せを、先ず仏前に謝しまつらずには居られません。

私が始めてお目にかゝつた時、老師にすでに七句を越えていられたが、その際、奥様が中風の難症で九年間床を離れられず、殊にお子様もあらせられぬこと故、独り淋しく老師の御介抱をうけていられると承り、その定めし切々であろう御心境を拝察して、私は懐しうてたまらず、幸に携行してありました短冊を取り出して

ただ一人泣くより外に途ぞなきわがためにこそ弥陀の

を惜しまれつゝ老師に先立たれたのであります。このことは「兎毛羊毛の先にいる塵ばかりも造る罪の宿業にあらずと云ふことあることなき」私の姿を身をもつて教示したもうものであります。

今この稿を書いておりますところへ老師から法信を頂きました、そこに次のお歌がありました。

## 堂の鈴

(七)

### 五智再会

心の弱い一郎は近頃は明けても暮れてもくよくよして居る。お茶の商売も兎角怠り勝である。柏崎の家では、何とかして一郎と信哉さんとを親しくさせたいと心を砕いて居る。信哉が近くに来れば、新茶が出来たと云つては、一郎を便にやる。美濃の本場から柿羊羹を貰つたから玉露で上げたといと招待する。

然し信哉は、いつも彼方此方とめぐつて歩くので、いつ

涙は  
いまもいま、玉のみ声のかゝるなりさぞ淋しかろう悲  
しかろうと

と歌の真似をしてお見舞申し上げましたところ、奥様はこの外およろこび下さつて、その後いくばくもなくしてお浄土に還り給うたのであります。

この度、小妻を誘うてはる／＼この勝縁を恵まるるのもひとえに奥様の私のために還相し給う深い御慈悲でありまして「今生夢のうちの契りを縁として来世さとり前の縁を結ばしていただく」その尊きなつかしきは言いようもなく、皆これ如来大悲の恩徳であります。

思えば、人間として世に生れた真の目的は、仏に会う為でありますのに、食う、着る、見る——そういうものだけを追うて、そこに、久遠に呼びつづけ給う仏のマコトがましましても、それを知る力もなく、知ろうともしない、「呼ぶ親の心は知らず幼児は、暮れる夕を帰ろうとせず」、それが私でありますのに、その私に、奥様はいまも還相し給うて、私を安養の浄土に誘うて下さいます。

奥様はまことに淑徳な方である上に、美しく、凡そ女性としてのよさをそなえていられた由であります、その天分も宿業には抗すべくもなく、数々の苦惱の中に、名残

今日もまた弘誓の船の中なれや 悲喜の業海の波荒く

と  
み仏は、かくの如くしてよき師を私のためにお慰み下さつて、又しても／＼業海の底深く沈んで行く私を、つねに願船に引き上げて安養の浄土に連れて帰つて下さいます。

南無阿弥陀仏 合掌

### 佐藤強三郎

も、オイ、ソレ、と急に会われるとは限らない。それで信哉は、行く先き／＼から、旅行の日取りを知らせてよこした。

桜の頃、一郎は信哉の御供をして、五智へ出かけた。五智の塔聳える古い寺の境内に、競い咲く桜を松の合間から眺める景色は、奈良を逍遙して猿沢の池をめぐる様な心地がする。此所はそれにも増して、日本海という偉大な池に佐渡が島を築山と見る風情は実に雄大である。

今日はお祭とて、大変な人出である。そんな人混みの中

で信哉と歩いて居た一郎は、松の木蔭から、お小夜の来るのをチラリと見た。お小夜は、一郎が近頃サツパリ来ないので、憂き晴しにお祭を見に来たのであつた。

お小夜は人混みの中を縫つて、ぐんぐん一郎に近づいて来た。一郎がハツと思う間に、わざと眼の前を、そしらぬ顔で通り過ぎた。それからどう廻つたのか、また一郎のうしろから来て、人混みをさいわい、ソツとつづいて何処かへ姿をかくしてしまつた。

信哉は桜に見とれては、度々人に突当つて文句を言われ「人混みの中の桜見物はのんびり出来ませんなあ！」と苦笑した。境内には、小屋がズラリと並び、奥には自転車の曲乗り、女子の軽業、楽隊やスピーカー等で賑かに、はしやぎたつていた。桜の根元へ来た時、信哉は「一寸待つて」と、亀と金魚の店の前でしやがんだ。そして小さな亀程高価なのを、けげんな顔つきで、子供と一緒に、楽しそうに見ている。

そのすきを見てか、お小夜は、天狗の様に、どこからともなく姿を現わして一郎に寄り添い、急に二言、三言、云い交わしてかくれてしまつた。

一郎はそれから信哉と境内を通り抜けて浜へ出、廻り道をして駅の方へ歩いた。町並近くに来た時、突然一郎は「この家へ寄りましょう」

お越しになりましたの。……目当はここなんでしょう」と一郎を見て、眼をはなさない。

信哉「ここだなんて、とんでもない。私はただ、桜見物に來ただけです」

小夜「貴方はそうでも、一郎さんはそうではありませんね。お一人で出で下されば良いのに。お連にささえられ、他人に後押しされてお出でになつたのね」

と八如何にも両親の口添えで、無理に信哉のお供をして来たのであろう。その目的は、どこまでも一郎と自分との仲を裂かせる手段なのであろう。と、お小夜は邪推している。小夜「私は、このお方が何と仰言つても、私共の交際は止めません。そのお積りで願いますわ。男女平等の世の中ですもの。男だけの我儘勝手は許されませんことよ」と一郎を見た。信哉はだまつていた。

お茶が出たあとに、お小夜は「これは残りで、失礼で御座いますか」と云つて、サントリウイスキーの角壺を持つて来た。また大分ある様子。グラスを三つ出して、自分も一杯グツと呑みほして、信哉にすすめた。

信哉はどんなことになるかと思つて見ていたが、これは面白いと、グツと呑みほし、お小夜のすすめるにまかせて、ついに三杯つづけさまに呑んでしまつた。一郎は一杯すらもて余していた。

と誘つた。門を入り、庭を歩いて行くと、看板が二枚見えだ。すぐに

池の坊、華道師匠  
表千家茶道師匠

であることがわかつた。信哉は、心にハハハア、これだな。……何で私をここへ？と、いぶかつた。

一郎は簡単に紹介した。部屋では釜の湯が、松風の様に鳴つていた。すぐお点前が始まつた。信哉は、形式ばらず自然の姿で、お茶を味わつた。茶椀をほめ、掛軸に感じ、活筒を珍品とほめた。それなのに、この部屋にはなぜか凄惨な気がただよっている。

お小夜は心に八この老人が、人の恋路の邪魔をするのか。なんで一郎さんについて来たのだろう。あんなに一人で来てくれと、一郎さんに頼んで置いたのに。これは柏崎の人が一郎さんにつけた犬に連れないと思つて、信哉を見ている。

一郎は話せばボロが出るとでも思つているのかだまつている。信哉は、なんの打合せもなく、不意に連れ込まれたので、皆目わけが分らぬ。仕方がないので、

信哉「今日の人出は大変でしたね。何時もあんなですか」ときり出した。

小夜「今年はことに多い様でございます。今日はどちらへ

小夜「一郎さんが一人で出でになつて、私にかく／＼のわけだからと、おとなしく、仰言つて下されば、またとくと考える気にもなりましように、……お年寄を連れていらしつて、それも、画家か、哲学者みたようなお方を連れてお出でになつたのでは、初めから、怖くて、氣楽に話を承る気にもなれませんがね。仰言らうと云うことは、大抵こちらでも見当がついていますわ」と、信哉の方にすると、眼差しを向けた。

カナリヤが丁度、廊下の所で鳴いた。雛が母鳥から餌を口うつしに貰つている。信哉はそれを見、頭を上げると、額にお母さんらしい肖像画が掲げてあるのを見ながら、

信哉「これはお母様ですか」

小夜「ハイ、それで御座いますが、知人の画伯が画いてくれたのでございます。……一郎さんのお両親はさぞ嘆

いていらつしやるでしょう。昔私が離縁になつて一人で家へ帰つた時には、母は泣いてくれました。その時、私が食事も咽喉を通らぬので、母は重湯や、お粥をたいたりしてくれました」

と静かに語り出した。一座はしんみりして来た。

信哉「楽焼がお上手とか承りましたが」

小夜「この茶椀は私の手製でございます。こちらの花瓶もこの盃も、……」

と取り出しては説明した。

信哉「大変御立派な出来の様に拝見致しますが、……そろそろ、お暇しませんか」

と一郎を見た。するとお小夜は急に立つて、信哉のそばへ来て、

小夜「まだ、およろしいでしょう。この残りをたいらげて下さいませんか」

と熱心にすすめるので、酒杯を受けながら

信哉「貴女は、お年の割に、大変苦勞なされた様にお見かけ致しますが、これからまた行く先が大変で御座います。鳥もねぐらに帰ります。だれもこの苦界に安住の地を求めて止まぬと思ひます。華やかな活花の御仕事にも、静寂な茶道のお仕事にも、暗い、あわたたしい事が、すくなくなかるうと思ひます。いや騒がしいからこそ、静けさを求めるのでないでしょうか」

と、ポツリ／＼と語りながら、南京豆や、南瓜の種子を肴にチビリ／＼とやつて、大分赤くなつた。お小夜は、信哉の傍に膝をすすめては、お酌をし「わたしにも一つ」を盃の催促をする。

信哉「良い酒はコクがあつて、うまみがありますね」

小夜「貴方様のお話もこの酒の様にコクがございますね」と、笑つた。信哉はお小夜を上げしげと見返した。

るが、自分の心は、つかずはなれず、ふら／＼している。一郎は心に思う／＼お藤はどうしてあんなに、あせらず落着いていられるのであろう。夫の私が不安であれば、最も不安なのは、妻お藤の筈である。それなのに親に対して、この夫に対しても、平素と変らぬ態度で居る様に見える。私を殊更、不貞の夫と見下げる様子もなく、それかと云つて、齒を喰いしばつて、憤りをおさえて辛抱し、すぎがあつたら逃げ出そうと云う様子でもないらしい。これは一体どうしたことであらうV……。

自分は、お藤を思うかと思えば、お小夜をも忘れ得ない。お小夜の顔と、お藤の顔とが、チャンポンにうつつて来る。どちらについて、どちらと離れるか。……ああ、居ても立つてもいられない。心は二つ、身は一つ。身体が裂けそうである。

商売に、一身を打ち込むことも出来ず、計算も間違ひ易くて困つている。親達も、それを見て毎日が氣でないようだ。

ある日、一郎は意を決して、父親に内心の苦悶を訴え、心氣一転、しばらく宇治の茶店へ営業見習にやつてくれと頼んだ。

老父「俺は異存がない。そのほうがよかるう。然しお藤とよく相談してからにするように」

と訓した。お藤に相談するとお藤「私は家で、いつまでも待つて居ります。心ゆくまでお修業をなさつて下さい。不動の心は、不動の御真実に会わねばいただけないと思ひます」

信哉「世の中があまり理詰めになり過ぎるので、落語などが流行るのでないでしょうか。うさ晴しに、酒もすこしは悪くありませんね。これで！」

と杯を伏せた。帰りがけた時に、信哉は額を見上げ、

信哉「お母様はどんなに貴女が可愛い。……まああのカナリヤを御覧」

と云つて辞去した。カナリヤはしきりに餌を雛に口うつしにしてやつていた。

一郎は近頃信哉と話をする様になつていた。信哉が来れば両親もお藤も、何と云うことなしに、話に花が咲いた。今日も一郎は信哉を自分から連れ出して、お小夜を訪ねあわよくば、信哉から助け舟を出して貰つて、お小夜と別れる様に話をこびたいと願つていた。お小夜の家に寄つたのも全く一郎の一人ぎめで、信哉には何も知らせずに行つたのであつた。

一郎は近頃どうしようかと、毎日々々考えあぐんでいるが決心がつかかねる。信哉の話を聞いて居れば、何となく頭をおさえられる様に感ずるのをどうすることも出来ない。親達の顔を見れば、さぞ親も苦勞しているだろうと悲しくなる。又お藤は影の形に添う様に、風も夜も離れずに居

と云つたが一郎には深い意味は理解する事が出来なかつた。

### 有毒果本生物語

ジャータカ物語

これは遠い過去の世の物語であります。

一人の智慧すぐれた隊商主が五百輛の車を引き東国より西国へ長い旅を続けておりました。そして、とある森の近く迄辿りついた時、隊商の人々を集めて、

「人々よ、この森の中には毒のある果実の樹がある。その実は如何にもおいしそに見えろが、一度味うた者は内臓が破れて命を失うものである」と教えました。

やがて森にはいつて行きますと、果して枝もたわわに美しい色艶の果物が芳醇な香を放つておりました。それは彼等の上等の食物アンラ果にそっくり似ておりました。そこである者は、その色や香や味に魅せられて智慧ある人の誠めも忘れ、ついこれをアンラ果であると思つて食へました。又ある者は、「これは隊主に尋ねておら食べることによろ」と、手に持つたまま主人の来るのを待つておりました。そこへやつて来た隊商主は、果物を手にしている者はそれを捨てさせ、すでに食べた者にはこれを吐きもとさせて薬を与えました。このようにしてその中の幾人かは助かりました。最初食べた者は命を失つてしまいました。

以上の物語を、ある時お釈迦様がお弟子にお話しになつて、次の偈文を唱えられました。来らんとする災を知らずして、諸欲を縦にするものは果熟する時これに悩むこと、有毒果を食えるものに似たり



# あとがき

八月一日は、昔の暦では、八朔と云つて祝いました。この日は徳川家康が江戸城に入城の日であり、農家では初穂を祝い供える日。一般工業家は昼休みも無くなり夜業の始まる日で、八朔のなが飴、など云つた由、古老の耳に残る言葉であります。

時代は転変し、現代の私共には八月と聞けば、終戦の日、広島、長崎原爆の日、そして、数限りのない悲しみ——親を、子を、夫、兄を失う——を胸に新らしく浮べつゝ八月盆が随所におこなわれる月であります。

然しそれも段々と遠のいて、お盆と云えば唄と踊りと太鼓と火籠で、ただ面白く賑やかに過ぎて行きます。それは本当に幸福なのかと、一歩押せば、それも表面だけで、更に凝視しますと、原爆、水爆の死の灰は空を濁りて居り、米ソの悪循環は、平和を求めめる人々の切なる声をも黙殺して、はて知らぬことで、不安と焦慮が到るとこ

ろに満巻いて居ります。

是処に、私共の「直実の家」を知らなければ、一日として、一時間として安んじ得ないことでありましょう。

嗚呼幸に、仏はこの家を建立し、常に喚び、待ちに待たれているのであります。

南無阿弥陀仏。

覚者あり声をからして呼びたまう

その声かすか我が胸を打つ

足利浄円師

× × ×

△榊原さんが、木村誠一氏をいたみ、且つはそこにひらめく大悲無倦の慈光を感佩されての一文を頂きました。くりかえし、くりかえしてやまぬ大悲が、しみこみとなつて下さることであります。

△松村さんの原稿は、三瓶徳英師を訪わられたの御法録、善財童子求道の一場面であります。

昔、一高の校長をしていられた新渡戸先生は、修身の時間に、友情というところでは何時も、

○ 映るとは月も思わずうつすとは

水も思わぬ広沢の池

の古歌を引かれた由であります。これが友情の至極でありましょう。信の御縁の人々の間にもその趣の一端を知らされます。

## ◎ 御 案 内

◎ 毎月第一、第二、第三日曜日午後一時半、一道会例会。

◎ 毎月二十四日午前、午後、昭区和小按町教西寺、法話会。

◎ 八月十七日、午前午後、四日市河原町、法泉寺。

◎ 九月七日、中村区岩塚、林高寺、午前午後。

定 価	一 部	二 十 五 円 (送 共)
	半 年	百 五 十 円 (送 共)
	一 年	三 百 円 (送 共)
編 集・発 行 人	花 田 正 夫	
名 古 屋 市 南 区 駈 上 町 二 ノ 八 八		
印 刷 人	本 田 政 雄	
名 古 屋 市 南 区 駈 上 町 二 ノ 八 八		
発 行 所	慈 光 社	
振 替 口 座 名 古 屋 一 〇 四 七 〇 番		